

## 様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520551

研究課題名（和文）近世ドイツにおけるコミュニケーションの歴史

研究課題名（英文） History of Communication in Early Modern Germany

研究代表者

山本 文彦（YAMAMOTO FUMIHIKO）

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30222384

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世ドイツにおける帝国郵便と領邦郵便の制度的発展およびその両者の協力関係を明らかにするとともに、郵便がこの当時の最も重要なコミュニケーションツールであり、郵便の発展は、舗装道路を始め、郵便路線図や郵便時刻表の普及をもたらしたことを明らかにした。また郵便の発展は、時間意識と空間意識の変化に大きく貢献し、中世的な時間・空間意識から近代的な時間・空間意識へと変化をもたらす重要なきっかけとなった。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the relationship between institutional development and cooperation of both the Empire-Post and Land-Post in Early Modern Germany and post was the most important communication tool in these days and clarified that the postal development brought a mail rout map and the spread of mail time schedules including a paved road. In addition, the postal development also contributed to changes in space consciousness and time consciousness was an important opportunity to bring change and awareness of modern time and space from the medieval sense of time and space.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,400,000	0	1,400,000
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,500,000	630,000	4,130,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：帝国郵便 領邦郵便 時間意識 空間意識 コミュニケーション

## 1. 研究開始当初の背景

国内におけるヨーロッパ中世・近世におけるコミュニケーション史としては、渋谷聡氏が論文「広域情報伝達システムの展開とトゥルン・ウント・タクシス家」において、タクシス家による帝国郵便の成立の一端を明らかにしているが、これ以外の研究は今のところ存在していない。わが国の西洋史研究において、従来この郵便史の分野は未開拓な分野に属している。一方ドイツにおいては、従来好事家による各地の郵便の歴史に関する研究が進展し、多くの雑誌が発行されるとともに、各地にはコミュニケーション博物館が整備され、それぞれの地域のコミュニケーションの発展に関する資料の整理・展示が進んでいる。その一方で近年ヴォルフガング・ベーリンガーが、タクシス家の帝国郵便の研究および近世ドイツのコミュニケーションの問題を精力的に研究している。本研究は、このベーリンガーの研究に依拠する部分も大きいですが、しかしベーリンガーの研究は多様なコミュニケーションの実態の把握に関心を集中し、この当時の帝国および皇帝と領邦の関係の分析という視点が欠落しているとともに、各地の領邦郵便の実態についてはごく簡単な概観にとどまっている。本研究は、単なる郵便史にとどまることなく、郵便に代表される近世ドイツのコミュニケーションの実態の分析を通じた国制史的研究を目指している。

## 2. 研究の目的

グーテンベルクによる活版印刷技術の改良の結果、15世紀後半以降多くの印刷物（書籍・パンフレット等）が現れるようになった。特に、宗教改革期に多くのパンフレットが印刷され、宗教改革の進展に強く影響を与えたことは、わが国でもよく知られている。本研究は、このような大量の印刷物が現れるようになったまさに同じ時代に誕生した郵便の分析を通じて、近世ドイツにおけるコミュニケーションの実態を明らかにし、近世ドイツ社会の一端を具体的に解明することを目的としている。本研究の目的の一つは、帝国郵便と領邦郵便のそれぞれの発展を具体的に解明し、両者の関係を明らかにする点にある。また郵便事業は、近代国家形成における重要な要素の一つであり、帝国郵便と領邦郵便の関係は、単に通信技術的な問題にとどまらず、当時の権力関係と密接に関わっていた。両者の関係の分析を通じて、この当時の帝国国制機関及び皇帝権と領邦国家の権力関係の一端を具体的に解明することができ

る。また、郵便レガリアをめぐる議論に関する研究が示しているように、従来の研究はこうした関係を理論的な側面に重点をおいて考察しており、関係の実態の分析をおろそかにする傾向にあった。本研究では特に、帝国郵便と領邦郵便の間で締結された協定の分析を通じて、両者の間における実際の争点を明らかにし、その解決方法を具体的に考察することにより、この当時の皇帝と領邦の関係のあり方の具体相を示すことを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 帝国郵便と領邦郵便の制度的発展に関する史料および帝国郵便と領邦郵便の間で締結された郵便協定の史料状況の調査。この史料調査においては、マルティン・ダルマイヤー編纂の史料集*Quellen zur Geschichte des europaischen Postwesens 1501-1806, Teil II. Urkunden-Regesten*, Kallmuenz 1977を利用し、当史料集から読み取ることができる領邦郵便の実態をまとめる。この領邦郵便の実態の調査の結果を、帝国郵便との関係および運営的な観点から整理し、近世ドイツにおける帝国郵便と領邦郵便の実態をまとめる。また、近世ドイツにおける郵便の歴史を考察するための重要な基礎的なデータとして整理する。

(2) 郵便に付随する諸問題の整理検討を通じて、近世ドイツにおけるコミュニケーションシステムを明らかにすること。舗装道路の建設・維持の問題、郵便路線図、郵便時刻表に注目し、当時の時間意識と空間意識の変化を明らかにする。これまでの西洋史学で対象としてこなかった史料群を多く用いることで、近世史を新たな研究視角から考察する。

(3) 情報が社会に与えた影響を具体的に把握するために、自然災害に関する情報に注目する。特に広域に被害や自然変化をもたらす大地震に焦点を絞り、被害に関する情報の広がりやそのスピード、その被害情報に対する同時代の人々の反応を検証する。

(4) 神聖ローマ帝国をコミュニケーション史の観点から分析する。帝国国制をコミュニケーションの観点から考察することで、ウィーン・レーゲンスブルク・フランクフルトをコミュニケーションの中心地と理解し、神聖ローマ帝国を一つのコミュニケーション空間と捉えることによって、神聖ローマ帝国の歴史的意義を新たな角度から分析する。

#### 4. 研究成果

(1) 1490年にドイツにおいて初めて郵便が誕生した後、1806年に神聖ローマ帝国が滅亡するまでの間の帝国郵便および領邦郵便の制度的展開を今回の研究によってほぼ網羅することができた。とりわけ郵便事業は、近世に新たに生まれた事業であったために、皇帝のレガリアに属す事柄なのか、あるいは領邦君主のレガリアに属す事柄なのか法的に確定していなかった。そのため帝国郵便と有力な領邦君主との間で多くのトラブルが生じ、結果的には領邦独自の郵便（領邦郵便）を持つ領邦が現れた。しかし郵便という事業の性格上、広域性が求められ、帝国郵便と領邦郵便は結果的には相互に協定を結んで郵便物等の交換ルールを定めた。この点に、ドイツが多くの領邦国家に分かれつつも、神聖ローマ帝国という枠組みの中で、郵便事業の共同性を保ったことが具体的に明らかになった。

(2) 郵便の発展と連動して、舗装道路の建設が進み、舗装道路が敷設されたルートが郵便馬車路線となり、該当地域のこの後の経済発展の大きな要因となった。舗装道路の建設および維持は莫大な費用を必要とし、この事業を継続的に行うために、国庫収入の増加および安定化が必要だった。戦争が絶え間なく起きていた近世において、軍事費以外の大きな出費は、財政的に大きな負担だった。郵便が国家財政に与えたインパクトの大きさを具体的に分析することができた。

(3) 17世紀以降多く出版された郵便路線図は、現在の道路地図の代わりを果たしており、この当時の旅行者は、郵便路線図を頼りに広域の旅行を行うことができた。郵便路線があることは、そこに道路と宿駅があることを意味していた。18世紀の「旅行革命」の背景に郵便の発展と郵便路線図および旅行ガイドブックの普及をあげることができる。

(4) 郵便路線図の普及と宿駅の時刻表によって、当時の人々の時間意識と空間意識は大きく近代化することになった。14世紀以降機械時計はヨーロッパ各地に広がっていたが、機械時計に基づく生活リズムを社会に定着させる上で、郵便が大きく貢献していた。郵便局に郵便配達夫が発着する時間は、機械時計による時刻表によって決められており、郵便を利用する者は、その時計時間を意識しなければならなかった。こうして近代的な時計時間による生活が徐々に社会に浸透した。また、郵便路線図、時刻表、郵便局間の距離図および郵便馬車料金表を利用することによって、人々は空間を計算することが可能となった。近代的な時間意識と空間意識を生み出す一つのきっかけが郵便であり、近世に起きた様々な出来事背景として、こうした意識の変化を念頭に置く必要がある。

(5) 近世においてはヨーロッパ各地で郵便が整備された結果、ヨーロッパ全域で情報伝達速度が格段に向上した。こうした速度の向上が啓蒙時代の背景にあった。出版物の増加や人々の交流の頻度の増加というこれまで指摘されてきた啓蒙時代の特色とともに、速度の向上も重要な指標である。さらに情報が実際にどのように配信され、人々がその情報にどのように接し、反応したのかという点も明らかにする必要がある。情報伝達速度およびその利用状況を具体的に把握するために、本研究では、大規模な自然災害を題材にした。まず14世紀に北イタリアで発生した大地震の際の情報の広がり方を検証した。被害情報が伝わっていく速度を、当時の様々な史料を用いて再構成した。この14世紀の状況と比較するために、1755年のリスボン大地震を取り上げた。ヨーロッパの多くの地域で揺れや水位の変化が観察されたこの地震の情報が、どの程度の速度でヨーロッパ各地に伝えられたのかを、当時の新聞記事および雑誌記事によって検証した。また有名なカントの「地震原因論」等もこのリスボン大地震への論考であり、特定の災害に対する同時代人の反応を具体的に知ることができる。情報の広がりとその速度を比較考察することによって、情報が社会に与えた影響を歴史的に分析することが可能である。

(6) 神聖ローマ帝国に関しては、これまで特に国制史的観点から分析し、1806年の滅亡に至るまでの国制的・政治的意義を検証してきた。本研究ではさらに、神聖ローマ帝国を一つのコミュニケーション空間として捉えることを試みた。先に挙げた成果ですでに述べたように、郵便は帝国全域である程度共同化されており、「ドイツ人意識」を作り出す前提にもなっていた。本研究ではこうした分析の他に、レーゲンスブルクに焦点を絞り、このレーゲンスブルクで開催されていた永久帝国議会にどのような情報がどのような速度で集まり、またこの永久帝国議会の審議内容がどの程度伝わり、またその速度はどの程度であったのかを具体的に検証する作業を行った。永久帝国議会の出席者と本国との間の通信状況、および永久帝国議会においてその代表を務めた皇帝の全権大使とウィーン宮廷との間の通信状況を検討した。この結果、レーゲンスブルクでは、その審議内容が直ちに印刷され、出席者から本国へと送られていること、また各領邦から出席者に伝えられた情報の多くも印刷されて、多くの出席者に伝えられ、その者を通じて各領邦に伝えられていること、レーゲンスブルクには神聖ローマ国内の情報だけでなく、ヨーロッパ規模の情報が常に伝えられ、議論されていたことが明らかになった。レーゲンスブルクは、まさに近世ドイツにおける政治的情報の中心

点の一つであり、ここから発せられた情報は神聖ローマ帝国はもとよりヨーロッパ各地に広がっていた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 山本文彦 「近世ドイツにおける郵便レガリア」『西洋史学論集』(北大西洋史) 10号、44～60頁、2007年、査読無し

[図書] (計1件)

① 山本文彦 南窓社、「時間意識と空間意識」  
阪本浩・鶴島博和・小野善彦編『ソシアビリテの歴史的諸相』、248頁(229～245頁)、2008年

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山本 文彦 (YAMAMOTO FUMIHIKO)

研究者番号：30222384

##### (2) 研究分担者

無し

##### (3) 連携研究者

無し